
プロジェクト報告

欧州地域統合の諸問題と、 東アジア外交の比較研究

羽 場 久 美 子

はじめに

冷戦終焉後、1990年代は民主主義・自由主義・市場主義の勝利と思われる時代が続いたが、21世紀に入り、リーマンショック、ユーロ危機以降、移民・難民問題、ナショナリズムや右派の成長など、地域統合再編に関する多くの難題がヨーロッパで起こっている。

他方、アジア地域では、経済成長に加え、AIIBやシルクロード構想など、中国の西に向けての地域再編、さらに東アジアでは、極東ロシアの再編を含め新たな地域再編が進行している。

本共同研究は、こうした新しい状況を生み出す、欧州地域統合と東アジアの比較研究に関する大学院生との共同プロジェクトとして、博士、修士の大学院生の協力の下、以下の研究を得た。

第1は、羽場久美子「アジア太平洋の国際関係とロシア」

第2は、杜世鑫「ヨーロッパとアジアの地域統合「一帯一路（OBOR）」は「ドーナツ現象」の解決策になりうるか」

第3は、的場貴彦「1970年代の日本の対中・対ソ外交—日本の戦略文化とスマート・パワー」である。

羽場論文は、冷戦終焉後の地域統合とアジアの経済発展という新しい動きに極東ロシアがどう対応して来ているのかを、地域再編、北極海航路、北朝鮮をめぐる緊張関係打開に向けての新動向について整理し、学術会議での国際共同プロジェクトの紹介も含め、ウラジオストクの国際会議で報告・議論を行った。

杜論文は、欧州の地域統合とアジアの地域統合の比較の中で、羽場が提起したアジア

地域統合の「ドーナツ現象」（アメリカと欧州に引っ張られ、中が空洞化する）について、中国、習近平の「一帯一路構想」、「新型国際関係理論」が、それを克服して近隣国との真のウィン・ウィン関係を打ち立てられるかを、中国の資料や論文に基づきながら考察したものである。

的場論文は、戦略文化とスマート・パワーという、近年の国際政治における Transdisciplinary な内政外交の分析手法を、1970年代の日本の対中・対ソ外交に援用し、新しい視点から日本の近隣国政策を再検討しようとした研究である。

これらの研究がさらに、欧州と東アジア外交における大学院生の国際政治分析に対する研究意欲を刺激することを期待したい。

今後も、院生と若手研究者の、地域統合研究および東アジアの中国外交や地域再編の研究を進めるために、本研究プロジェクトを、資料調査、研究報告、論文執筆など研究の深化に向けて、役立て発展させていく所存である。

国際政治経済学研究科および国際政治経済学会の諸先生方には、今後とも若手研究者のご指導ご教授をお願いするとともに、本プロジェクトの実施とその研究成果に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。